

Title	商品の萌芽形態に於ける社會的性質 (特別號)
Author(s)	谷口, 吉彦
Citation	經濟論叢 (1926), 22(1): 113-127
Issue Date	1926-01-01
URL	https://doi.org/10.14989/128361
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可 (毎月一冊一日發行)

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷二十二第

行發日一月一年五十五大

特別號

- 重複課税の本質……………法學博士 神戸 正雄
- 米穀關税と輸出地の米價……………法學博士 河田 嗣郎
- 世界經濟の成立過程……………法學士 作田 莊一
- 清酒庫出税と租税の立替……………法學士 汐見 三郎
- 西陣の補助業に就て……………經濟學博士 本庄榮治郎
- 商品の萌芽形態に於ける社會的性質……………經濟學士 谷口 吉彦
- マルクスの所謂社會意識形態に就いて……………法學博士 河上 肇
- 朝鮮産米増殖計畫と世論……………法學博士 山木美越乃
- 家産制度の利弊……………經濟學士 八木芳之助
- 海運に於ける表定運賃の特質……………法學士 小島昌太郎

(禁轉載)

商品の萌芽形態に於ける社會的性質

谷口吉彦

目次

- 一 個人的使用價値の社會的使用價値への轉化
- 二 獨立關係の依存關係への轉化
- 三 商品形態の發展と其の社會的性質

一

商品と言ふまでもなく、何等かの有用性を具へた使用價値でなければならぬ。併しすべての使用價値が商品でないことは、吾々の家庭に於ける種々の消費財が使用價値ではあるが商品でないことによつて明らかであらう。それ故に一物が使用價値であることは、その物が商品たるために必要な一條件であるとしても、其は必ずしも十分な條件ではない。一物が商品であるためには、使用價値たることの外に、なほ何等かの條件を必要とする様に思はれる。

周く知らるゝ如く、總ての商品は、使用價値であり且つ價値である。併し又、使用價値であり

且つ價值である總ての物が、常に必ず商品であるかどうかは問題であらう。例へば資本家の生産過程に堆積する種々の生産手段(機械・原料等)は、歴史的には、商品が貨幣に轉化し貨幣が資本に轉化し、更に貨幣資本が生産資本に變形したその生産資本そのものであるといふ意味に於て、其は商品の轉化したものに相違ない。従つて是等の生産手段は、貨幣が商品であるといふと同じ意味に於て、或る種の商品であると言ひ得るかも知れない。併し乍ら生産資本が商品資本から區別せられて、『商品形成の物的要素』たるに止る限り、生産手段は普通の意味に於ける商品ではない。それ等は『その販賣者の手に在る限りに於て、商品である』²⁾に止まり、『 $C-Pm$ なる取引が完了するや否や、商品(Pm)は、もはや商品ではなくなる。』³⁾それ故に總ての商品は、使用價值及び價值であるとしても、すべての使用價值及び價值は、普通の意味に於ける商品ではない、と言はねばならぬ。即ち使用價值であり且つ價值であるといふ二重の性質も亦、商品をして商品たらしむるに十分な條件ではない様に思はるゝ。然らば謂ふ所の商品をして商品たらしむるものとは何か?

問題は、謂ふ所の使用價值が、自然的絶對的に觀念さるゝか、若くは社會的相對的に觀念さるゝかにある様に見ゆる。言ふまでもなく使用價值は、物が物として有する所の絶對的な自然的性質である様にも見え、同時に又それは、物と人間との關係に於て發揮さるゝ所の相對的な社會的

1) Marx, Das Kapital, II, S. 13.

2) a. a. O. S. 61.

3) a. a. O. S. 82.

性質である様にも考へられる。今、商品は先づ第一に使用價值であるといひ、また商品は使用價值及び價值であるといふ場合に於て、謂ふ所の使用價值とは如何なる性質のものであるか？これが私の考察せんとする最初の問題である。

言ふまでもなく商品は、一の歴史的社會的存在である。「勞働生産物は、あらゆる社會狀態に於て使用對象であるが、勞働生産物を商品に變形するのは……歴史的に限定された、一發展時期に限る。」然らばそれは、如何なる『歴史的』の『發展時期』に於て、如何なる事情によつて行はるるものであらうか？

純然たる自給的の原始共產社會にあつては、其の社會共同の勞働生産物は、すべて其の社會自身のための消費財であり、従つて自己のための使用價值であつたことは言ふ迄もない。然るに、かゝる自給社會に於ける勞働生産力の發展は、必然に勞働生産物の増加となり、それがまた必然に、過剰生産物を發生せしむることとなる。過剰生産物も亦、その物の自然的性質に於ては、有用物であり使用價值たるには相違ないけれども、併し其はすでに分量的に過剰となつて居るのであるから、その限りに於て、その社會にとつては今は全く不用物であり、従つて其はもはや使用價值ではない。この過剰生産物に對する使用價值の否定こそ、實に生産物交換の起り得る最初の一條線をなすものである。「一の使用對象が、可能的に交換價值である第一の方法は、非使用價

値としての存在、即ち所有者の直接の欲望を超過した使用價值量としての其の存在である。生産力發展の必然の結果たる生産物の量的發展は、必然に使用價值の非使用價值への轉化となり、これが、過剰生産物を相互に交換せしむるための『可能的』な『第一の方法』となつたのである。

今かくの如き状態に達した一の社會が、同じ事情の下にある他の社會と接觸する時は、前者甲の過剰生産物 A と、後者乙の過剰生産物 B との間に、直接の生産物交換が行はれ得ることゝなる。何故かと言ふに、此の場合に甲に於ける A は、甲にとつては非使用價值であるが、併し此のことは、A の自然的性質としての有用性を破壊するものではないから、其はたとひ甲にとつては非使用價值であつても、乙にとつてはよく使用價值たり得る。のみならず、甲のために非使用價值たることは、乙のために使用價值たるための必要な條件である。何となれば、使用價值はただ使用若くは消費によつてのみ、使用價值たるの實を現はすものであり、一個の帽子は、同時に二人の使用對象たることは出来ないからである。さうして此の場合、A が甲にとり非使用價值であり、B が乙にとり非使用價值であることは、既にそれ等が過剰生産物として存在することに依つて前提されて居る。かくて A は甲にとり非使用價值であると同時に、正にそのことに依つて乙にとり使用價值となり、同様に B は乙にとり非使用價值であると同時に、甲にとり使用價值となり、茲に始めて、甲乙の間に A と B との過剰生産物が交換せらるゝことゝなる。此の『直接の生

産物交換の形式は、 $X \rightleftharpoons A \rightleftharpoons B \rightleftharpoons Y \rightleftharpoons B \rightleftharpoons A \rightleftharpoons X$ である。此の場合 A B なる物は、交換以前には商品でなく、交換によつて始めて商品となるのである。

商品はいかゞの如くして、共產社會相互の間に於ける過剰生産物の直接交換によつて、始めて出現する。其は固より商品として生産されたものではなく、交換によつて始めて商品となつたものではあるが、併し交換せらるゝ瞬間に於て、既に其は直接に消費者の手に渡つて居るから、もはや商品ではなくなつて居る。換言すれば、交換によつて商品となり、同時に交換によつて非商品となる。商品となると同時に商品ではなくなる商品、謂はゞ商品の萌芽であつて、現はるゝと同時に消え去つて居る。此の商品の萌芽は、後に述ぶるが如く、社會形態の進展するに従つて次第に發展するのであるが、吾々の當面の問題である商品の使用價值に關する限り、商品の特徵は、此の萌芽形態に於て明らかに現はれて居る。即ち勞働生産物が交換によつて商品となるためには、先づその物が所有者にとり非使用價值でなければならず、反對に一たん商品となつた物でも、交換によつて新たな所有者にとり使用價值となる時は、其の瞬間に於て商品ではなくなる。此の意味に於て商品は、所有者にとり非使用價值でなければならぬ。また他方に於て、交換によつて商品となるためには、非所有者にとり使用價值でなければならず、反對に一たん商品となつた物でも、交換によつて新たな非所有者にとり使用價值でなくなると、直ちに商品たる性

質を失ふ。此の意味に於て商品は、非所有者にとり使用價值でなければならぬ。即ち「總ての商品は、其の所有者にとつては非使用價值であり、其の非所有者にとつては使用價值である。」⁷⁾

此のことは又、商品は自己にとり使用價值でなく、他人にとり使用價值であることを意味し、更に個人的使用價值でなく、社會的使用價值たることを意味する。個人的使用價值を否定することによつて、社會的使用價值を肯定することが、交換物たるための、また商品たるための、條件である。それ故に商品は、最初に述べたる如く、先づ第一に使用價值でなければならぬけれども、既に商品となつた場合の使用價值は、單に物の自然的性質としての絶對的な使用價值ではない。物の自然的性質が、人間との交渉によつて發揮さるゝ所の相對的な社會的性質としての使用價值であり、更に自己のための個人的使用價值を否定することによつて成立する所の、他人のための社會的使用價值である。さうして一たん商品となつた物が、交換過程を経過することによつて非商品に轉化するものは、此の他人のための社會的使用價值を否定して、再び自己のための個人的使用價值を肯定するからである。

然し乍ら、謂ふ所の個人的若くは社會的使用價值は、決してそれ自身に於て存在するものではなく、物の自然的使用價值に基くものなることは、言ふ迄もない。此のことから二つの注意すべき結果を生ずる。第一に、商品の使用價值は社會的使用價值ではあるけれども、併し其の社會的

7) a. a. O. S. 51.

使用價值は、自然的使用價值を離れては存在し得ないものであるから、そこで商品は、常に其の一面の性質として、自然的形態を具ふる感覺的な對象物として存在せねばならぬことゝなる。第二に、個人的使用價值の否定、社會的使用價值の肯定といふも、其は要するに一物の固有する自然的使用價值をば、或は否定し或は肯定するに過ぎないのであるから、そこで別の見方を以つてするならば、單に使用價值の否定による其の肯定と言つても、何等差支ないことゝなる。

かくの如くして勞働生産物の量的發展は、先づ第一に過剰生産物に對する使用價值の否定となり、第二にそれに對する社會的使用價值の肯定となり、第三に交換過程に入ることに依つて商品に轉化する。さうして交換が全く偶然に行はれた時代にあつては、使用價值の非使用價值への轉化だけは、既に生産物が分量的に過剰を示した瞬間に於て行はれて居るが、併しそれが更に他人のための社會的使用價值として肯定さるゝのは、偶然に行はるゝ交換過程に於て始めて可能である。然るに過剰生産物が規則的に發現し、交換が稍々規則的に行はるゝ様になると、使用價值が否定さるゝと同時に、すでに其の瞬間に於て、それが他人のために使用價值たり得ることが習慣的に確定せられ、従つて交換對象物たる可能性が確實に期待せられて、過剰生産物は交換を目的として保留若くは貯藏せられることゝなる。此の場合には商品生産はまだ發生しては居らぬけれども、併しすでに交換以前に於て生産物は商品に轉化して居る。従つてその商品性は、前の萌芽

的商品に比し、稍々確定さるゝことゝなつた。然るに更に一段の發展を遂げて、過剰生産物を過剰労働の形に於て留保し、之を以つて最初より交換を目的として他人のための使用價值を生産するに至り、茲に始めて商品生産を發生するのであるが、此の場合には、労働生産物は初めより、自己のための使用價值を否定せられ、他人のための使用價值として生産せられて居る。前の二つの場合には、自己のための使用價值を否定した結果として、他人のための使用價值となつたのであるが、商品生産の場合には、反對に、他人のための使用價值たる結果として、自己のための使用價值を否定する。使用價值の否定による其の肯定が、使用價值の肯定による其の否定に轉化したのである。要するに商品に於ける使用價值は、自給生産物に於けるがまゝの使用價值ではない。それが一段の *Aufhebung* によつて、個人的使用價值から社會的使用價值へ轉化したものであり、その否定による肯定、若くは肯定による否定を経たものである。さうして今日の資本家的商品は、其の量的及び質的發展によつて著しき特徴を有するに至つたものではあるが、併し其の使用價值に關する限り、萌芽形態に於ける商品若くは初期の商品生産と異なる條件の下にあるものではない。

二

使用價值の否定による其の肯定は、生産物が商品に轉化するために、『可能的』な『第一の方法』

たるに過ぎない。商品となるためには、單に他人のための使用價值となるのみならず、更に「それが使用價值として役立つ他人に、交換によつて引渡されねばならぬ。」¹⁾従つて勞働生産物が、單に生産者のための使用價值を否定するゝことに依つて非生産者のための使用價值となつたとしても、其處には必ずしも商品が發現するものではない。例へば「中世の農民は、封建君主のために年貢用の穀物を作り、僧侶のために十分一税用の穀物を作つたけれども、併し年貢用の穀物も十分一税用の穀物も、それが他人のために生産されたといふことで、商品にはならなかつた。」²⁾また奴隸制度の下にあつては、奴隸の所有主は、既にその個人的勞働を免れて、奴隸をして主人のための使用價值を生産せしめつゝあつたが、併し奴隸の生産物が主人のために生産されたといふことで、それが商品とならないことは、恰も賃傭勞働者の生産物が資本家のために生産されたといふことで、勞働者と資本家との間に、生産物の商品交換が起り得ないのと同斷である。

それ故に他人のための使用價值が、私的交換の對象物となり、勞働生産物が商品に轉化し得るためには、その物が、獨立したる個人の私的勞働の結果たること、若くは私有權の對象物たることを必要とする、即ち「獨立的な互に依頼し合はない私的勞働の生産物のみが、互に商品として對立するのである。」³⁾勿論あらゆる勞働生産物は、それ自體としては、人間の外部に存在するものであるから、その限りに於ては他人に讓渡し得るものである。然し乍ら、「此の讓渡が相互的であ

1) Das Kapital, I. S. 7. (第四版註, エンゲルス)
2) a. a. O. S. 7. (同上)
3) a. a. O. S. 8.

り得るためには(私的交換が成立し得るためには)人々はたゞ默契的に其等の讓渡物件の私有權者として對立し、さうして實にそのことによつて、相互獨立の人格として對立さへすればよい⁴⁾のである。

然るにかくの如き、「私有權者」としての「相互獨立の人格對立」は、原始共產社會の成員間には勿論存在しない。従つて純粹な形に於ける共產社會の内部に於て、私的交換の存在しなかつたことは勿論であつて、最初の交換は、共產社會相互の間に行はれた一種の國際貿易であつた。併し乍ら反對に又、相互獨立の人格對立が、互に接觸なき孤立状態にある時、その間に交換の成立せざることも亦明らかである。それ故に原始共產社會の成員間に交換の存せざりしと同じく、ロビンソンの孤立生活に交換の存せざりしことも亦明らかである。従つて生産物が商品に轉化するためには、その生産者は、相互獨立の人格對立たると同時に、先づ或る程度の接觸を有せねばならぬ。「商品交換は、それ／＼の共產社會の盡きる所に於て、即ちそれが他の共產社會若くは他の共產社會の成員と接觸する點に於て始まる。」⁵⁾即ち商品の發生し得るためには、少くも生産者の間に、或る程度の社會關係の存在することを前提とする。

然し乍ら商品交換が國際貿易たる性質を有する期間は、さう長くは繼續し得ない。共產社會相互の間に於ける商品交換は、必然にその社會の内部に反映して、其處にも亦私的交換を成立せし

4) a. n. O. S. 53.
5) a. n. O. S. 54.

める。かくして共産社會の内部に侵入した私的交換は、必然に其の共産社會を崩壊せしむるに至るのであるが、對外交換たると對内交換たるとを問はず、それが過剰生産物に就て偶然に行はるる交換たる限り、交換當事者の相互の接觸は極めて稀薄であり、殆んど自給獨立の域を脱して居らぬ。

然るに交換の機會と可能が増大するに従ひ、『他人の使用價值に對する欲望は、次第に確立して來る。交換はその不斷の反覆によつて、遂に一の規則正しき社會的行程となり、同時に相互の經濟的接觸は規則的となり、それだけ兩者の生活は相互の影響を受けることとなる。更に交換が一段の發展を遂げて、過剰生産物を過剰労働の形に於て留保し、之を以つて最初より他人のための使用價值を生産する様になると、既に商品交換は一の規則正しき社會的行程となつて居り、且つ商品生産は部分的にせよ既に起つて居るのであるから、私有權者としての獨立の人格對立は、その反面に於て、極めて密接なる接觸關係に發展して、商品交換は彼等の生活に著しき影響を及ぼし得る様になる。

然し乍ら過剰労働を以つてする商品生産の時代は、それが過剰労働である限り、相互獨立の人格對立は、たとひ密接なる接觸關係を有したとしても、其の間には、相互依存の關係はまだかく稀薄である。彼等の接觸關係が依存關係にまで進むのは、總ての労働を商品生産のために没頭せ

しめ、従つて各々の生産物がすべて商品として現はるゝに及んで、始めて明瞭となるであらう。換言すれば、社會的分業が確立して、各生産者が最初より商品生産に従事するに及んで、相互獨立の人格對立は、全く他人の勞働によつて生活する所の、相互依存の人格聯立となる。此の程度に達した商品生産は、社會的分業を前提條件とする。相互の依存關係がそれに依つて確保されざる以上、總ての勞働を以つて他人のための商品生産に没頭することは出来ないからである。それ故に此の種の商品生産のある所、常に社會的分業に依る依存關係が在存せねばならぬ。即ち「社會的分業は、商品生産の存在條件である。」⁷⁾ 従つて「私的交換が分業を前提するといふのは正しい。」⁸⁾

かくて商品生産が發展するに従つて、社會的分業は益々深化し、従つて相互の依存關係は益々密接となると共に、相互の獨立關係は反對に減退する。かくて獨立關係の消滅は、依存關係の完成となり、同時に商品の消滅となる。けれども商品生産の存する以上は、獨立關係は依然として存續せねばならぬ。

かくの如く、發展したる商品生産の存在は、社會的分業及び之による相互依存の關係を前提とするけれども、反對に、社會的分業及び相互依存の關係の存在することは、必ずしも商品生産の存在を前提しない。「社會的分業は商品生産の存在條件ではあるが、併しその反對に、商品生産

7) a. a. O. S. 8.

8) Zur Kritik, S. 42-43.

は社會的分業の存在條件ではない。』⁹⁾従つて『私的變換が分業を前提するといふのは正しいが、分業が私的交換を前提するといふのは、誤謬である。』¹⁰⁾例へば『古代印度の共產社會に於ては、勞働は社會的に分割されて居るけれども、その生産物は商品とはならぬ。尙は一層手近な例を擧ぐれば、如何なる工場に於ても、勞働は組織的に分割されて居るが、此の分割は、勞働者がそれ／＼の生産物を變換することによつて媒介さるゝものではない。』¹¹⁾それ故に分業に依る依存關係の存在することは、必ずしも商品交換の存在を前提するものではない。共產社會は、商品生産に對しては之を容るゝの餘地がないけれども、社會的分業に對しては寧ろ之を前提とするものである。

かくの如くして、商品の發現及びその發展は、交換關係の發現及びその發展を意味し、交換關係の成立及びその發展は、一方に於て、相互獨立の人格對立を條件とすると共に、他方に於て、相互依存の人格聯立を條件とする。此の獨立關係の肯定的否定は、商品生産の發展すると共に、次第にその程度を加へて獨立の否定に進み、同時に依存關係の否定的肯定は、次第に其の程度を加へて依存の肯定に進む。かくて商品生産の最後の發達階段たる今日の資本家生産は、獨立關係の全稱的否定、及び依存關係の全稱的肯定、従つて生ずる商品の消滅、之を去ること僅に一步の所に止まる様にも考へられる。

三

9) Das Kapital, I, S. 8.
10) Zur Kritik, S. 42-43.
11) Das Kapital, I, S. 8.

以上述ぶるが如く、商品が商品として有する社會的性質は、それが最初より商品として生産されることなく、生産物が途中から轉化した所の商品の萌芽形態に於ても、既に早く之を具有する。其は第一に、商品自體の使用價值が、自然的若くは個人的使用價值から社會的使用價值に轉化せねばならぬことを意味し、第二に、商品所有者が、相互孤立の人格對立から相互依存の人格聯立に轉化せねばならぬことを意味する。さうして今日の資本家社會に於ける商品は、かゝる萌芽形態に於ける商品の次第に發展したものであるから、其はかくの如き萌芽形態に於ける商品の社會的性質以外に、更に多くの社會的性質を具有することとなる。例へば、生産物の交換が一の規則的な社會的行程となると、商品の種々なる使用價值は抽象し去られて、等一性を有する價值對象物となり、商品の萌芽形態は茲に一の發展をなして、商品交換といふ社會的行程より來る一の社會的產物として、商品價值といふ他の社會的性質を附加さるゝに至る。けれども商品は、既に述べたる如く、何等かの意味に於ける使用價值でなければならぬから、そこで此の程度に發展した商品は、商品價值即ち價值たると同時に使用價值であるといふ二重の社會的性質を有せねばならぬ。所で價值と使用價值とは、互に依存し互に排斥するといふ關係にあるから、商品が此の二重物として現はれるや否や、一方には使用價值を脱却した純粹の價值物としての貨幣商品を分化せしめ、他方には價值を脱却した純粹の使用價值たる消費財となつて商品の運命を終へる。然

るに商品から分化した貨幣が、單なる流通手段若くは支拂手段として働く限りに於ては、本來の商品も亦、所謂單なる商品に止まるものであるが、貨幣が資本としての機能を發揮するに至ると、本來の商品は、更に一の新たな社會的性質を獲得して、價值増殖のために、資本としての消費財に轉化し、更に商品資本として發現する。茲で始めて、今日の資本家的商品となるのであるが、是等幾階段に亘る商品社會性の發展を詳述することは、私の當面の問題ではない。唯私の注意せんとする所は、社會の生産組織の發展を意味する所の商品形態の發展は、商品の社會的性質の發展乃至加重を意味するものであり、且つ商品の萌芽形態に於ける社會的性質は、今日の資本家的商品が存在するための基礎的可能的條件の一として、歴史的にも觀念的にも缺くべからざるものであるといふ點にある。(完)